

2014年9月21日主日礼拝説教(要約)

聖書 ルカによる福音書 6章 20～26節

説教「神の国に生きる幸い」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

祈りのうちに12人を使徒として選び出された主イエスは、彼らと一緒に山を降り、人々に御言葉を語り、病気をいやしていかれます。そうした宣教の日々の中、主イエスはご自身の弟子たちに向けて、本当の幸いとはどういうことかをお語りになりました。マタイによる福音書の「山上の説教」では、「心の貧しい人々は、幸いである」から始まる8つの幸いを告げる言葉が並んでいますが、ルカによる福音書では幸いなことだという4つの事柄(20～23節)と、不幸なことだという4つの事柄(24～26節)が並べられています。

「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」。「今飢えている人々は、幸いである、あなたがたは満たされる」。「今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる」。そして「人々に憎まれるとき、また人の子のために追い出され、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなたがたは幸いである」と続きます。これら4つの幸いが語られる中で、一番強調されているのは4番目の幸いです。この最後の言葉は、この福音書がまとめられ読まれた教会において、深い慰めを持っていたに違いありません。ユダヤ人の会堂を中心に町の人々の親しい交わりが形成されていた時代、主イエスを信じて歩み始める人々には周囲との摩擦や困難な戦いが生まれていました。キリスト者が会堂から追い出され、汚名を着せられるという事態が生じていました。彼らはそうした日常の戦いの中で主イエスの告げられる幸いの言葉を深く味わいかみしめたのです。「その日には、喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。この人々の先祖も、預言者たちに同じことをしたのである」(23節)。かつて大事な役割を果たした預言者たちが皆迫害を受けたように、あなたがたも皆その預言者たちに連なっているのだと主イエスは言われるのです。

貧しさ、飢え、悲しみ、そして人々からの憎しみや迫害、どれ一つとっても喜ばしいものではありません。ふつうに考える幸福とは正反対のものばかりです。けれども、主イエスはそうした人々の間に立たれ、あなたがたは幸いなのだと告げられるのです。

これは心の持ちようでも幸せな気分になれるとか、今はつらくても将来、神の国ではいいことがあるということではありません。あなたがたは、貧しさ、飢え、悲しみ、迫害の中で、私と出会い、私と共に歩むようになった、それは何と幸いなことかと言われるのです。これは主イエスだけが語り得る幸いであり、主イエスが私たちの中に作り出してくださる幸いなのです。

それと反対に4つの事柄が不幸であると告げられています。これらは前半の言葉をち

ようど裏返していくような文章となっています。富んでいる、満腹している、笑っている、これらはいずれもこの世的には幸福のしるしです。しかし、「あなたがたはもう慰めを受けている」(24節)とあります。「受けている」というギリシア語は商業用語で、領収済みという意味だそうです。もうやりとりが終わっている、つまり、富んでいる中で、慰めとか安心はそれなりに得ているかもしれないが、神さまとのやり取りはなく、神さまとの関係は切れてしまっている、そして神さまの慰めを必要とすることがない、それは何と不幸なことか、と主イエスは言われるのです。

どんなに華やかな生活をしていても、自分自身の中にある空虚さ、貧しさ、惨めさに気づかないままにいることは不幸なことだと言わざるを得ません。悔い改めの涙をもたない自己満足は、神との交わりに生きることができません。ある牧師が書いておられました、「正しい信仰の第一歩は、偽りの確信から正しい不確かさへ、偽りの満足から正しい渇きへと進むことにほかなりません」と。

「すべての人にほめられるとき、あなたがたは不幸である。この人々の先祖も、偽預言者たちに同じことをしたのである」と締めくくられています。人にほめられることはうれしいことです。しかし、忘れてならないことは、人にほめられることは神に義とされることと同じではないし、人間の採点やこの世の評価は神の評価とは異なるのです。信仰と愛に生きるとは、この世での損得勘定をあわせることではないし、皆にほめてもらうことを期待することでもありません。私たちの望みは、終わりの日、神の前で「忠実な僕だ。よくやった」と言っていただけのことにあります。

ところで、私たちはこれらの言葉を聞くとき、幸いな貧しい人たちと不幸な富んでいる人たちのいったいどちら側に身をおいているのでしょうか。貧しい人と富んでいる人、飢えている人と満腹の人、泣いている人と笑っている人が出てきますが、これらの線引きは所得水準とかこの世のさまざまな評価基準によってなされるものではありません。ここには私たちへの招きと私たちへの戒めがあります。すなわち、私たちは、富める者、満腹している者、笑う者となって、自己満足の中に眠り、人々の賞賛やお世辞でよい気分になり、神の招きを無視し神の御言葉を聞き捨てにすることがあります。けれどもまた、あの徴税人ザアカイのように、富と地位を手に入れながら、自らの空虚さに気づき、主イエスを求め、主イエスに出会い、悔い改めをもって新しい生活を始め、これまでとは違う幸いを得ることもあります。最初から、主の告げられる幸いから締め出されている人はいませんし、反対に富める者の不幸に当てはまらない人もいないのです。主イエスは、私たちを神の国に生きる幸いへと招いてくださっています。自分の持てる物ではなく、神の御言葉と約束に望みをおいて歩む私たちを、主は何と幸いなことかと祝福してくださっているのです。

(9月21日主日礼拝の説教から)